

会議結果の公表

| | |
|-----------|--|
| 附属機関等の名称 | 沖縄県立図書館協議会 |
| 日時 | 平成27年3月3日（火曜日） 14:00～16:00 |
| 場所 | 沖縄県立図書館3階研修室 |
| 出席委員名 | 吉田肇吾会長、大城進副会長、上原明子委員、堀川輝之委員、池城かおり委員 今井俊二委員、呉屋美奈子委員 |
| 議題及び報告事項 | <ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 「新収蔵資料展」及び「ビジネス支援コーナー」の紹介 3 館長あいさつ 4 議事 <ul style="list-style-type: none"> 報告事項 <ul style="list-style-type: none"> ①平成26年度運営状況について ②平成27年度当初予算の状況について 5 各委員からの図書館への質疑・提言 6 閉会 |
| 議事の概要 | 報告事項に対する質疑応答を行った。 委員からの質疑及び提言は議事録のとおり。 |
| 公開・非公開の別 | 公開 |
| 非公開の場合の理由 | - |
| 所管課等 | 沖縄県立図書館 |
| 問い合わせ先 | 総務班 担当 田中 電話 098-834-1218 |
| 備考 | |

平成26年度第2回沖縄県立図書館協議会 議事録

日時 : 平成27年3月3日(火曜日) 14:00-16:00

場所 : 沖縄県立図書館 研修室

出席者 : 吉田肇吾会長、大城進委員(副会長)、上原明子委員、堀川輝之委員、
池城かおり委員、今井俊二委員、呉屋美奈子委員

傍聴者 : なし

<議事内容等>

会議に先立ち、今年度からの事業である県立図書館ビジネス支援事業の取組と平成26年度新収蔵展の様子視察を行った。その後、館長のあいさつの後、吉田会長の進行により、事務局から議事について説明を行い、質疑を行った。

議事における発言要旨は以下のとおり。

(事務局から、報告事項について説明)

(委員)

利用統計について、去年の1月末と比べて来館者が減っているが、たとえば去年の催しの内容や、現年度の催しの内容によって来館者数に変動があったということか。

(事務局)

当館では駐車場不足が課題で、前年度は開館中に開催していた郷土史講座を、今回は休館日に開催いたしました。そのため前年度は郷土史講座の参加者は入館者としてカウントされていましたが、今年度はカウントされておりません。そういったことも影響しているのではないかと考えられます。

(委員)

郷土史講座に参加しましたが、参加者が多く、老若男女、年齢構成も幅広く、講師も乗りに乗って、大変盛況であった。

関連して入館者数について、前年実績が35万となっている。これから3月までには30万台になり、末日には前年度実績に近づくとと思われる。入館者が多いに越したことはないが、県民の利用促進からいっても、多様な取組の中で30万を超えるので説明がつくのではと考える。また、県立図書館の責務や使命について、協力貸出への参加及び貸出実績を見ると、参加はしているが貸出冊数は「0」というところがあり、参加してない町村もいくつかある。せっかくサービスがあるのに、こういう状況があると、学校関係者としては疑問が残る。この点に関しては、強い呼びかけをしてもいいのではないかと委員として要望したいと思う。この件に関して伺いたい。

(事務局)

協力貸出は今年度から試行として始めており、直接関係する市町村に行ったり、行け

ないところは電話や移動図書館で行くときに広報等しております。しかし、町村によって意識の差がある箇所も多少あります。小さい町村では担当者が一人で多くの仕事を抱えたりして人的な余裕がないところもあると思われます。また、町村によっては担当が毎年変わる場合や、本務職員ではなく非常勤職員や臨時的任用職員の場合もあり、毎年同じ説明をしているようなところもございます。

(委員)

協力貸出はとても大事なサービスだと思うので、職員としては繰り返し、強く言いにくい面もあると思うので、本協議会の委員からも、こういう強い申し出があっても、ぜひ共に頑張ってもらいたいということも言ってもいいのではないかと思います。

(委員)

久米島町が突出している。それが成功事例ということで、なぜ成功しているのかを細かく分析し、いいところを他のところにあてはめるようなやり方で、他のところも伸ばしていけるのではないかと。久米島でうまくいっている理由がことこまかにわかれば、いろんな手が打てるのではないかと思いますので、そういう調査もしてみてもどうか。

(事務局)

久米島の場合、3人担当者がいらっしゃいまして、その3人の方の連携がうまくいっているといます。

(委員)

確かに受入側の体制や職員の問題等があるが、県立図書館の立場としては、全県域内に視野を広げて、特に、離島域、本島内の遠隔地、図書館のない市町村の子供達にいろいろな資料、情報に触れさせるということをぜひしてほしい。職員の意識については、より強く啓発、周知していく努力はさらに必要かと思う。

(委員)

先ほど館長から、予算を組み替えてほぼ前年度並みを確保したと説明があった。全体としてはご苦労があったらと思うが、よかったと思う。感謝申し上げる。

一括交付金の分を差し引くと若干減った前年並みということになると思うが、その中で特に評価したいのは、報酬日額の増額で市町村図書館の先鞭をつけた心意気。本当に市町村図書館の励みになるだろうと思う。これだけの予算組替の中でここに踏み切ったということは、人材の養成、育成、確保が大切であるということが実行されている。

また、レファレンスの件数が増えていたり、国会図書館からの感謝状があったり、図書館の使命という話がある中で、そこの部分の予算が組み替えで若干減らさざるを得なかった点は、これからの図書館のニーズと反比例している。おそらくレファレンスのニーズは高くなるし、図書館側も使命感に燃えている中で、沖縄県の文化の水準を確保するための図書館の予算という視点からしても、課題解決のための人材に予算を投入できない沖縄県の文化の水準はいかかなものかということも、つきつけていけないといけな

いだらうと思う。文化水準のアップのためには、あと一步、図書館側あるいは私達委員の方からも、レファレンスあるいは図書館の人材の確保、意識向上に予算を分配していないと、どんなにビジネスが高まっていっても、結局は県外に食われていく。県民の文化を高めていくということは、こういう予算の付け方も影響しているだらうと思った。

(委員)

ビジネス図書館として充実してきていることに非常に感謝申し上げる。ただ、ビジネスというのは技術が高まればそこにお金生まれるわけではない。沖縄らしいビジネスというのは、沖縄の文化や伝統工芸といったバックボーンをわかった上で技術がそこにのっかってお金生まれる仕組みを作ることができる。そういったものをつなげるのが、図書館のレファレンスの大きな役割のひとつだと思う。ビジネスを始めたいと尋ねて来た方に対して、どういったビジネスをやりたいのか、実はその根っこにはこういった沖縄の文化があるんだよ、というような視点で案内してもらえれば、非常に奥行きのある支援になると思う。

もうひとつ。専門書はどうしても新陳代謝が激しいので、その点は気を使って、古いものは新しく刷新し、ニーズを拾えるように配慮してほしい。

(委員)

昔から、図書館を見ればその地域の文化水準がわかると言われている。館内資料が「なぜこのような本が、この程度しかないのか。」とか、職員に質問した際に「なぜこの程度の回答しかしてくれないのか、それはすでに自分でやったこと。そこから先がわからないから聞いているのに。」というレベルでは、利用者の図書館に対する期待度はどんどん薄れていく。生涯学習社会に移行しつつある今、ご指摘があるように、沖縄という地域社会の文化水準を高めていくために、図書館は何を考え、何を整備し、どのような体制を作り上げて、県民に何を提供していくのか、ということであらためて考えなければならない。

お金の総額もだが、その使い方や体制の組み方についても、「これまでの図書館の考え方はこうでした、だから現在も、そして今後もこうです。」という時代ではない。それでは図書館を取り巻く社会の方が先に行ってしまう、下手をすると図書館は社会変化に取り残されてしまう可能性がある。その意味で国から市区町村レベルまで、公共図書館全体が大きく見直しの時期に入っていると思う。そして、市区町村立図書館をバックアップする都道府県立レベルの図書館は、今後の変化の方向性見据えて、その内容をどう変え、整え直すかを検討して、時代に対応させていく必要がある。その一貫として、これまでやってきた企画・イベントだけでは足りない。ニーズの多様化に伴って、いろいろな新しい要素が入ってくる。そのような新しい社会のニーズに応じて取り組んでいく時、館内職員だけでは明らかに無理である。図書館外部のいろいろな組織・団体の人達と協力して、一緒に組み立てていくという考え方が必要になってくる。

(委員)

今日の前半の館内視察は非常によかった、郷土資料の中核的役割を改めて認識した。

また、課題解決型という新しい、未来型の取組におけるビジネス支援、就職関連の市場評価ナビはさすがだと思った、しかし、利用はまだそんなに多くないという話だった。あれだけの職員の汗と努力の結晶としての新システム等が動かないのは辛い。賃金職員を入れるなり、分掌を再編して担当を置くなりして、戦略を立て広報を充実させて、努力が報われるような方向を出すべきではないかなと思う。今回の予算の中で、そういった賃金職員をあてるような部分はあるか。

(事務局)

賃金予算の中では、広報担当を予定している部分はありません。

(委員)

現在、周知広報に関してはどの班が担当か。何人いるのか。

(事務局)

奉仕班の企画のグループですが、体制的に広報専従を置く余裕がなく、皆兼任となっています。

(委員)

広報は大切に、とても手間暇がかかる。マスメディア対策や関係機関との連携、あるいはデザイン等、やればいくらでも業務があるので、戦略性を持って、新しい方向性、そういう方向性も、今後考えてほしい。

(委員)

宮古島市から来ている者として、離島読書活動支援事業と離島読書活動充実事業について感謝する。この2つ予算の関連性と、一括貸出や収集強化のターゲット等の想定について聞きたい。離島読書活動支援事業に加えて離島読書活動充実事業の予算ができた背景はどういうものか。

(事務局)

離島読書活動支援事業は平成22年から始まっていますが、最初は約1,000万円の事業規模が、5年間かけて約1,500万円まで増えております。事業を実施する以前は、移動図書館は最初は実績0で、一括貸出も1,000~2,000冊程度でしたが、現在は移動図書館は年38回実施し、貸出冊数は移動図書館と一括貸出の両方とも約10,000冊で、合計約20,000冊というところまでできております。

離島読書活動充実事業は、一括交付金を活用し、離島が多く、図書館未設置町村や公民館図書室もないエリアが多いといった特殊性から、そういった地域を支援して本を貸し出ししたり、移動図書館に持って行く本を現在の平均約400冊から約1,000冊に持って行けるよう資料を充実するといったことを目的としています。

(委員)

この予算は本の予算ということになると思うが、その内訳はビジネス関連であったり、いろんな分野にまたがると思ってよいか。

(事務局)

移動図書館は子供の利用が多いので、絵本やいろんなジャンルの児童書、また大人ですと料理や子育てといった実用書や小説等が多く利用されますので、そういったものを中心に、少しずついろんなジャンルの本を揃え、今まで400冊の中で持って行けなかったようなものを少しずつ幅を広げて持って行けるようになればと考えております。

なお、離島向けのビジネス関連資料の予算はビジネス支援充実事業の方に入っておりますので、この予算とは別になります。

(委員)

先ほどビジネスエリアの視察を見て、宮古島市にも欲しいと思い、離島読書充実事業に反映させてもらえるかという期待があった。ビジネス支援充実事業に予算があるということで安心した。

(委員)

離島域に貸し出す一括貸出の資料は、離島からのニーズ調査を踏まえて県立図書館が取捨選択をしてセットを組んで送るのか。あるいはこちらの判断で送るのか。

(事務局)

一括貸出につきましては、図書館のホームページで1冊ずつ選ぶこともできます。しかし、それでは、最大400冊まで借りられますので、400冊選ぶのは非常に大変ですので、セットを作っております。たとえば夏休みセットや一般用郷土セットといったセットが110余りあり、ホームページで内訳の確認もできますので、それを確認して選んで申し込んでいただければ、そのセットを送ります。

(委員)

講師費について、これだけの予算で、子供向け、大人向け、図書館向けと、よくこの内容ができていると思う。今回は、例年の倍以上の予算になっているので、さらに充実した内容になると期待している。ぜひ続けてほしい。

また、資料修復と製本委託の予算だが、この修復と製本の内訳はどうなっているか。また、修復は自前でやったり、ボランティアの方たちにやってもらっているのか。

(事務局)

修復が必要な資料が書庫に多くあり、それを修復する際に複製本を作成して、その複製本を閲覧提供したりしています。修復は、古文書等の修復で、専門的なものなので修復業者に委託しています。また、当館が原本を所蔵していない資料について、原本を借りて複製本を作って閲覧提供するということがあります。こうした複製本も専門家が作成する必要がある場合は委託しています。

こうしたものと別の、たとえばページの落丁等の修理は、ボランティアの方をお願いしたりしています。

(委員)

私が委員に就任した当初から、来館者数の分析がなかなかできない状況が続いている。県立図書館が新しくなったら、数値目標、来館者目標等いろいろ高みを求められてくると思う。どういった客層が図書館に多く足を運ぶのかというところを上手くキャッチアップするシステムを今から作っておかないと、新館ができて、前年比減だったりすると、そこに予算投入した結果が厳しく問われてくる。たとえば入館者のなにか峻別するような方法、貸出カードとなにか紐付けるような仕組みを今からアイデア出して1年間トライアルをして、次次年度予算にシステムを入れるような方向を考えるといいのではないかと思う。

私は、図書館の主要客層で年配の方も多という状況で、少子高齢化で来たくとも来られなくなる方が多いのではないかと思う。逆にビジネス図書を増やすことで、若い方も足を運ぶようになってきたということであれば、そこは数字として裏付けを持っておかないと、理論武装は難しい。そこはぜひ取り組んでほしい。

(委員)

なにをもって利用とするかという議論があると思うが、ホームページの閲覧であるとか、検索の実績とか、そういったものも実績に加えていくことで、直接来館、直接利用以外の実績としてあげられるのではないかと思う。

また、宮古島市では新図書館を予定していたが、2013年オープン予定が2017年3月に延期され、さらに延期というニュースがあった。県立の支援をお願いしたい。一つの離島だが、こういった状況等も細やかに見て丁寧にヒヤリングしてもらえるとありがたい。

(委員)

本というのは、県民全体、児童生徒はもちろん、学生、成人にとって大切な教育資源であり、日常的に本と向き合うことは大事なことと強く思っている。とりわけ県立図書館は、図書館未設置市町村の住民への読書機会の提供、あるいは本県児童生徒の読書指導を含む、県民全体の知の拠点として、その役割は大きいものがある。現在、県立図書館のあり方は、時代性や県民のニーズ等に答えながら改善してきており、本を通して知との出会いを提供するとともに、郷土史やビジネス創出の専門家等、多彩な専門的知識等を持った人との出会いを通して知との出会いを作るという2つの視点、このことは、本と人が一体となって、県民の読書意欲、あるいは活字への関心を喚起しながら、ひいては県民の資質の向上に期してきている。近年、そういう形で事業が展開されてきていると捉えている。

沖縄県教育委員会の点検評価報告書の中に、県民へのサービス充実と利用促進、そして、関係団体との連携強化が謳われている。そういう観点から見たところ、今日現在の結果状況については、一般県民の視点から見て、おおむね尊重できると思う。

しかし、今後、人や金や時間等の限られた条件の中で、県立図書館としてのあり方と

役割、また新館も見据えて、新しい事業の必要性や効果性、独自性と創造性、グローバル化等を踏まえて、組織をあげての省察と展望、中長期的な視点も大事にしながら、今後の事業や業務の在り方等を工夫して、さらに魅力ある県立図書館づくりにこれからも不断に取り組まれることを期待したい。

(委員)

レファレンス件数が着実に増えているのは非常にいいことだ。世の中が複雑化、多様化してきて、どういうふうに調べたらいいかというのが難しくなっている時代。ここが一つのニーズの掘り起こしのポイントとなると思う。たくさんあるレファレンスの中には、すぐ返せるようなシンプルなものから、非常に難しい質問、質問というより不満や新しい要求等いろんなことがあると思う。そこでご苦労したところが新しいことを考える上で突破口になると思うので、難しかった点、困った点、新しい取り組みで突破できたことや、新しい人脈によっていい情報を得て対応できた等、いろんな事例が出てくると思うが、館内でそうした情報の共有ができれば、全体のレベルが上がり、最終的に職員のレベル向上、レファレンスのレベル向上、専門性の向上につながると思う。

ニーズもいろいろわかってくるので、次はどういうイベントをしたらいいのかとか、言っては来ないがこういうことで困っている人はもっといるはずだという想定の下に使い方の説明をすとか、新しい資料を作るとか、いろんなことが展開できると思う。レファレンスの分析と情報の共有と、それに基づいてディスカッションしていくことが、ひとつ方法としてあると思う。

(委員)

今のご指摘は、図書館としては当然のこと。担当者が質問を受け、どのようなプロセスで問題を解決して、どういう内容の回答提示をしたのか、それを記録して、他の職員にも間接経験させて知識を蓄えていくというような環境を整える。

県立図書館では、すでになされていると思うが、ご指摘のように、これまでなかった新しい問題、ややこしい問題は次々に出てくるので、そのときどのようなプロセスを辿ったのかということは、他の職員も勉強になるので、引き続き分析・共有してほしい。

最後に、新図書館に向けての来年度はどのような段階に入っていくのか聞きたい。

(事務局から、新館の概要説明)

(委員)

4フロアに分かれると管理が難しくなる。それを維持できるだけのスタッフ体制がとれるかという問題が大きい。この点については、是非、十分なスタッフ数の確保と研修等を通しての質の向上を図ってほしい。

ついでに言えば、これからの生涯学習社会における図書館では、開館時間の延長や開館日の拡大等という図書館サービスの枠組み全体の見直しも出てくるだろう。祝日は休館というようなことについても、従来の公務員的発想で、世の中が休みだから我々も休みという考え方は、もはや通らなくなりつつある。以上